

一月定例聞法会のご案内

*期 日 平成十四年一月十六日(水曜日)

*時 間 (昼席)午後二時三十分より (夜席)午後七時よ

り

*会 場 (昼席)心光寺本堂 (夜席)心光寺庫裏

*講 師 大石 法夫 先生(広島市在住)

心光寺からのお便り

新年明けましておめでとう
ございます。

今年の元旦は割合に暖かく
喜んでおりましたところ、
翌二日は一転して、終日吹雪
の吹き荒れる厳寒の一日とな
りました。夜半には積雪もか
なりの量に達していました。
平成十四年はこのようにして
始まりました。

さて今年一年が皆様方にと
りまして、また私にとりまし
て、どのような一年になりま
すか。思わぬことが待ち受け
ている年になるかも知れませ
ん。しかしどのようなことが
待ち受けていても、そのこと



正月二日、雪ふりしきる心光寺境内の様子

を通して、いよいよお念仏に出会わせていただく一年にさせていただきますのだと思います。

話は変わって、昨年暮れのことです。列車通勤の私は、過日帰りの列車の中で、ふとした問題に心がひっかかって、何かしら浮かぬ気分を引きずったまま

列車に揺られていました。湯平駅に着いて列車から降りると、いつものように家内が車で迎えに来てくれていました。車に乗ると、家内は待ち構えたように今日一日のことをいろいろ話してくれます。私はくすんだ気分をひきずったまま、黙って聞いています。

その話の中で、「ものみの塔」の人たちが来た時のものがありました。「ものみの塔」の人たちは、家内があまり嫌がらずに話を聞くので、日頃からよく訪ねて来るようです。その日その人たちは家内との話のやりとりの中で、「重荷を背負う者我に來たれ」という聖書の一節を開いて、その箇所についての話しを始めたということです。

その話を聞いている時、思わず私の口から、

「行かなくても、来ている」

という言葉が出てきました。自分でも予期しないことでした。ところが自分の口から出たその言葉に、自分ではとりました。そして「ああそうだった…」と思いました。

南無阿弥陀仏のお名号は、私がこれから改めて行かなくても、仏様の方から既に私の所まで来て下さっている撰取不取の働き（撰め取って捨てない仏の働き）の名告りでした。だから私の方からはどうする事も要らないのでした。そのままということでした。

これほど広大な世界はないのでした。私は自分の口から出た言葉によって、忘れていた世界に立ち返らせられる思いがしました。仏様が私の口を伝って出て下さったような気がしました。まさにご廻向（仏様が私どもに与えて下さる恵み）です。

大石先生は前回、お話の中で、

「私は平凡なことを喜ぶ。朝目が覚める。顔を洗う。ご飯をいただく。そういう平凡なことが有難い。私は無趣味、無風流だが、今は平凡な生活そのものが趣味ですね。」

とおっしゃいました。平凡なこと。当たり前のこと。しかし実はそこにこそ、広大無辺の汲み尽くせぬ味わいがあるということでしょう。当たり前のことが、実は最も当たり前ではなかったのです。

空気があること。息をしていること。これらは当たり前のことで、何ら取るに足りない陳腐なこと。有難くも何ともないこと…と私は思っています。しか

しよくよくお話を聞かせてもらおうと、この一息がなかつたら、私のいのちはあ

りません。この一息は、

私の生まれた時から今
日まで、眠っている時も、
腹を立てている時も、ず

の

っと休むことなく続い
ています。決して私の力
で続けてきたものではあ
りません。そうしてみる
と、この一息は仏様から
の賜りもの。無量寿むりょうじゆのい
のちの現れであること
に気づかされます。当た
り前どころではありま
せん。

息だけではありませ
ん。この身のどこを取っ
ても、また私に今与えら
れている環境や状況の
どこを取っても、無量寿
のいのちの現れでない
ものはありません。それ
を当たり前と思つて、
足蹴あしげにし、恬てんとして顧み



心光寺の秋の彼岸法要後、湯平駅にて友松敏和さん、伸二さん親子の見送りを受けながら、帰り

ることのないのが私です。

「弥陀の誓願 祖師の恩 それからそれへと めぐらせば この身はご恩の固
まりじや それとも気づかず 今までは 我が儘わ まま氣儘ま まの二悪道さんまぐてう よくもこの
身が今日までも 生きてこられたものじやもの……」

これは大石先生のご師匠である藤解とうげ先生が作られたという歌の一節です。本
当にこの歌の通りであります。罰当たりの私であります。

「行かなくても、来ている」のに、行こう行こうとして、考えから考えへと

思弁の迷路に迷い込んで、一体自分がどこに立っているのやら、その位置さえわからなくなつて、途方にくれ、心に闇路をかかえて、暗い荒野をとぼとぼ歩んでいるのが私です。それが私の心象風景です。昨年十月のご案内の中に書いた通りです。そして私が帰りの列車の中で陥おちいっていたものもそれでした。

このような私の闇を開いてくれたのが、思いがけず私の口から出て下さった「行かなくても、来ている」の言葉でした。

行こう行こうとしている世界より、行かなくても既に来ている世界の方が、どれ程大かわかりません。それを教えて下さるのが仏様の教えです。行こう行こうとしている世界など、行かなくても来て下さっている世界に比べれば、塵ちり・芥あぐたのようなものです。否いな、塵・芥などという言い方がそもそも大間違いです。塵・芥も人為の手の届かぬ無辺の存在でした。そうではなく、私の考え、思いが、非存在の夢ゆめまぼろし幻まぼろしでした。仏語でいえば、「龜毛きもうの如し」(曇鸞どんらん大師)。つまりどこにもないのに、有るかのごとく固執しているに過ぎないものでした。

どうすることも要いらない広大無辺の世界を、今ここに与えられておりながら、自分の自己了解を加えなければご信心がいただけに思ってしまうのが私でした。そこに浄土があるのに、更にその上に浄土の了解を重ねようとしているのです。これほどの愚おろはなないでしょう。

そのようにして構築した世界を、辺地懈慢界へんちけまんがい(実際は偏った独善的な世界にいるのに、自分では無上の境地を得たと慢心し、求める心を失った世界)、また二十願の世界(念仏を称えるけれども、念仏を自分の善根にしてその功德によつて救われようとする為に、自分の殻から出ることができず、真実の浄土を自ら閉ざしているあり方)というのでしよう。

私が列車に揺られながら考えていたことも、実はその問題でした。聖典の中にある辺地懈慢界へんちけまんがい、二十願の世界についての箇所を読んでいる時、その世界に自分は今居るのだと感じたのです。ところがそのことを薄々感じながら、それを明瞭にとらえきれない。その不安が、前述のくすんだ気分の底流にありました。

しかし今や私の心は、そのような辺地懈慢界へんちけまんがいに居ることがはつきりしました。心とは元々そのようなものに他ならないのでした。そして同時に、私のこの身は、既にそのような自己了解の一切要いらない世界、そのようなものによって微動だにしない世界を確実に生きていたのでした。

「行かなくても、来ている」——この世界の確実さに触れることと、にもか
かわらずどこまでも行こう行こうとする妄執に久遠劫くおんこうじ来生らいせいきて来た。今も生き
ている。そのことをはっきり知ることとは、実は同一、同時、同事のことことでし
た。

そんなことを、家内が私に聞かせてくれた話をきっかけとして教えられまし
た。

さて今年初めての定例聞法会がやってまいります。大石先生をお迎えし、皆
様方をお迎えしての定例聞法会の準備を、今年もこうして滞りなく始めさせて
いただけることは、私にとりましてこの上ない喜びです。そのことをしみじみ
感じつつこの便りを書いています。

今は一年中で寒さの最も厳しい時季ですが、寒気にめげず、どうか聞法の場
に足をお運び下さいませ。皆様方のお出でを心よりお待ちしております。

南無阿弥陀仏

文隆拜

平成十四年一月七日

撰取山 心 光 寺